教育出版

Educo エデュコ

学びのチカラで 人と社会を 未来へつなぐ

No.59
2022年

巻頭インタビュー p.2

ピアニスト
フジコ・ヘミングさん

知っておきたい教育 NOW p.4
①子ども一人一人の育ちと学びを理解し、
豊かな学級経営と深い授業づくりを促進する
②大切にされていると思うとき初めて言葉は届く
教師が育つ、子どもが育つ学校へ
～In-Child Recordを通して～

きょういく見聞録 p.8
江戸川区に子どもたち自身が心を動かし、
創造力を育む場所を。

地球となかよしトピックス p.10
わが町に「致道館」あり
～現代に息づく江戸時代の「個性伸長」の教育実践～

Information 北から南から p.12

地球となかよしゼミナール p.14
【連載第3回】
困難なときこそ文化芸術
～カタルシス（喜怒哀楽）を美術で体験、子どもの成長に必須～

Front Runner p.15
【連載第1回】
未来を描き、「学び」を拓く

ほっとな出会い p.16
メイク・ア・ウィッシュ オブ ジャパン
チーフアドバイザー 大野 寿子さん

ピアノから聞こえてくる母の声
～今も耳に残る叱咤激励～

ピアニスト **フジコ・ヘミング**さん

ピアニストの母と画家の父の間に生まれて

私はベルリンで生まれ、幼少期に一家で日本にやってきました。母がベルリンに音楽留学していたとき、スウェーデン人の父と出会って結婚したのです。お嬢様育ちの母は気性の激しい一面があり、父としょっちゅうつかみ合いの喧嘩をしていました。当時の日本は戦争の気配が濃厚で、外国人排斥の気風があったため、父は強制送還されてしまい、そのまま母と離婚。母はピアノ教師をしながら女手ひとつで私と弟を養ってくれました。

幼い私がでたらめに鳴らしていたピアノの音が得も言われぬほど美しかったので、母は私にピアノを教えようと思ったとか。それでも、ピアニストにしようというつもりはなく、自分は男運が悪かったので、ピアノを教えることさえできれば女一人どこに行っても食べていけるというのが理由のようです。おかげで、大人になってからの長いヨーロッパ生活でも生きていけたので、とても感謝しています。

いま、東京の自宅にあるブリュートナーのピアノは母がドイツ留学時代に購入したもので、作られてから１００年以上は経っています。私が８００万円くらいかけてヨーロッパに送って直したので、今でこそ素晴らしい音色ですが、幼い頃はガタガタで、弾くのも嫌になるくらいひどい代物でした。ピアノを直すお金もないほど、母は経済的に困窮していたのね。それでも、どんなに貧しい日々の中でも母はこのピアノだけは決して手放そうとはしませんでした。

青山学院の思い出

苦しい生活の中でも母は私を青山学院に通わせてくれました。当時の横浜市長の娘さんや大臣の子など、裕福な家の子が多かったのですが、みなさんとてもよいかたで。当時のお友達とはいまだに仲良くしています。最近、いじめで自殺する子どもの新聞記事を読んでいると不思議な気がします。青山学院で私をいじめた子なんて一人もいないし、いじめの話なんて聞いたこともなかったですね。当時の初等部の院長が、米山梅吉さんという大変素晴らしいかたでした。ときどき学校にいらして、「自分がされて嫌なことは人にもしないこと」とよく諭されました。この教えこそ真の教養ではないでしょうか。ただ有名になってお金をたくさん儲けることばかり教えていたら、世の中いつまでたってもよくならないと思いますね。

初等部では楽しく過ごせていたのですが、中学に上がると学校が大嫌いになってしまって。クラスに30人いれば、全員を同じに扱うじゃないですか、学校って。勉強したい人もしたくない人も、賢い人もそうでない人もみんな同じに扱う。それが嫌で、学校へは行かず映画館にばかり通っていました。黒澤明の「羅生門」もイタリー映画の「にがい米」もそのころ観ましたけど、素晴らしい映画がたくさんありましたね。当時は5本立て上映で１００円か２００円で観られたから、朝に映画館に入って5本映画を観て外に出ると、星が出ていましたよ。お金がないときは交番に行って、電車賃を落としたと嘘をついてお巡りさんに借りました。次の日返しに行って、お巡りさんと仲良くなったりね。そんな不良学生でしたけど、学校に行くより映画を観ているほうが、よっぽど世界について知ることができました。

PROFILE ©AOBA PIANO

スウェーデン人の父と日本人の母のもと、ベルリンに生まれる。東京藝術大学卒業後、28歳でドイツ留学。ベルリン音楽学校を優秀な成績で卒業。レナード・バーンスタインやブルーノ・マデルナに才能を認められるが、リサイタル直前に風邪をこじらせ聴力を失う。耳の治療に専念しながら音楽学校の教師の資格を得、ピアノ教師をしつつ欧州各地で演奏活動を続ける。日本帰国後の1999年、NHKドキュメンタリー『フジコ あるピアニストの軌跡』が大反響を呼び、デビューCD『奇蹟のカンパネラ』が大ヒット。以来、世界中で公演活動を行っている。

次々押し寄せる苦難

最近、大学の入試問題が事前に漏れたというニュースがありましたが、私が在学中に出場した日本のピアノコンクールでも、同じように嫌らしいことはありましたよ。二次予選に通った人だけ本選の課題曲を知らされて、1か月かけて仕上げるのですが、予選通過者で私にだけ曲名が知らされなかった。私が師事していたレオニード・クロイツァー先生は当時の日本の音楽界で冷遇されていたのです。本選では10人中7人の先生が私をビリにつけた。とにかく、この女、消しちゃおうって。公正な審査をしてくれる先生も中にはいましたが、正直にやってくれる人ばかりじゃないから、残念なことね。

藝大卒業後、海外留学しようとしたところスウェーデン国籍が失効していたことが判明し、日本国籍の取得も認められず、無国籍に。赤十字の難民申請をして、28歳でようやくドイツに留学できました。しかし向こうでは難民扱いなので、いじめや差別、学生同士の足の引っ張り合いなど日常茶飯事。母のわずかな仕送りでは足りず、

一週間砂糖水だけ飲んで飢えをしのいだことも。それでも、レナード・バーンスタインの引き立てを受け、ウィーンでコンサートを開くことになったときは天にも昇る心地でした。ピアニストとしての成功は目の前でしたが、コンサート直前に風邪を引いて、耳が聞こえなくなってしまった。初日だけはどうにか弾いたけど、残りの日程は全部キャンセル。それから丸々2年間、全く聞こえなかった。今は治療のおかげで、左耳だけ40％ほど回復しています。

心の支えになった信仰

私はクリスチャンなので、どん底の日々を送る中でも神様の教えが心の支えでした。幼い頃、キリスト教の日曜学校に通っていて、すごく楽しかったんです。牧師さんがとてもいいお話をしてくれて、そのお顔が輝いていて、神様のように見えて。で、すっかり神様を信じちゃった。「殺すなかれ、盗むなかれ」、それらの教えを守ってさえいれば、神様はちゃんと私を守ってくれる、どうにかしてくれると信じていました。なるようにしかならないとも思っていたけどね。でも不思議ですよ、ここまでになるのは。

母は仏教徒でしたけど、仏教だって教えの中身はほとんど一緒です。イスラム教の友人もいますが、やはり「殺すなかれ」が肝要で、テロリストが言う「神の名において殺す」なんてのはあり得ない。そんなことはコーランのどこにも書いてないって友人は言っています。

©AOBA PIANO

ウクライナでは毎年コンサートをしているのですが、共演した人たちがどうなったか心配です。ロシアはあんなに大きな土地があるのに、なんで隣にちょっかい出すのかわからないわ。モナコだってリヒテンシュタインだって、小さな国土ながら平和でお金持ちで、長く繁栄してるじゃない。ロシアの楽団とも何度も共演しましたが、みんな本当にいいかたたちでしたよ。

温かく人を教え導く大切さ

風邪をこじらせて耳が聞こえなくなったあとは、ピアニストになるのは無理だと悟りました。ピアノ教師をして生活していこうと思って、スウェーデンで耳の治療をしながら、音楽教師の資格を得るための学校に通いました。私は小さい頃から母に一日中「バカ」「アホウ」と怒鳴られどおしだったので、40歳を過ぎるまで自分を世界一のアンポンタンだと思っていたんです。でも、その音楽学校で知能検査があったとき、私が一番になって。そのとき初めて、自分はそんなに馬鹿でもないんだとわかって、すごくうれしかった。

母は子どもへのピアノの教え方もよくなかったですね。「先週と同じじゃない、全然直ってない！」と大声で生徒さんを怒鳴りつけて、おいおい泣かせてしまっている。ますます弾けなくなってしまうじゃない、そんなの。なんでこんなことやるのかなって、子どもながら見ていて思ったわね。私もドイツやフランスで15年間、たくさんの青少年にピアノを教えましたけど、母のような教え方は絶対しませんでした。曲を選ぶにしても、この曲をやりたいか、やる気があるか、必ず本人に聞いて決めさせたわね。楽しく教えたほうが伸びるから。学校の勉強だってそうなのよね、やっぱり。生まれつき勉強の得意な子とそうでない子がいますから、学校の先生方は生徒のできが悪いからってひっぱたいたり、いじめたりするのではなく、あったかく、人間的な教え方をしてほしいですね。

教科の勉強も大事だけど、正直にこの世を過ごす、正しい道を行くことの重要性を教えるほうが、よっぽど大事だと思います。私だっていつもピュアというわけにはいかない。馬鹿なこともいっぱいやりましたから。でも、自分のやった過ちを後悔して反省して、人としてだんだんよくなっていく。人生はそのためにあるんだって最近は思います。

海外生活を経て日本に思うこと

長いこと海外で暮らしましたが、ドイツ人の気質には苦労させられました。石頭で融通が利かなくて、しょっちゅう人に難癖つけては裁判を起こすの。みんなの真似をして同じ格好をすると安心して、ちょっと変わっている人を見るとクスクス笑うあたり、少し日本人に似ているかもしれない。その点、フランス人は全く反対で、違っていることを好みます。みんなが右に行くなら自分は左に行く。いい意味で他人のことなんて全く無関心だから、気が楽です。

ずっと日本に帰らなかったのは、「日本にあなたの活躍する場はないわ」と母に言われたから。母が亡くなって2年後、母が購入して長年住んでいた東京の家が人手に渡ってしまうかもしれないと聞いて、ようやく帰国しました。

日本では伝統的な古い家並みや景観をどんどん取り壊しているでしょ。あれが、すごく惜しいですね。日本人自身が日本の文化を壊している。私は飛行機が嫌いで、北海道も九州の演奏会もみんな汽車で行くんですが、長旅中は車窓から景色を眺めるのが楽しみなんです。ところが、ここ1・2年の間に昔ながらの日本の家屋がほとんど消えてしまった。箱みたいな家ばかり建っていて、本当に残念。東北のほうに行くと、かろうじてまだ残っているけど。

着物とか歌舞伎とか、日本には独自の素晴らしい伝統や文化がたくさんあるから、若い人たちは日本の文化を大事にして、後世に残していってほしいですね。学校はこういうことをもっと教えるべきだわ。

母への思慕はやまず　怒鳴り声は今も耳に

私は長いことベジタリアンで肉も魚も食べませんが、ドイツ時代からジャガイモを毎日食べて栄養源にしています。今も世界中を飛び回って精力的に演奏活動を行っているので、「すごい体力ですね」と言われますが、ピアノを弾くには体力より頭がちゃんとノーマルに働いていることのほうが肝心なんですよ。

もう何度も演奏会を経験しているのに、いまだにステージに出るときはすごく怖いですね。一度なんて、家でピアノをさらっていたらピアノの中から「このアホ―ッ」って母の怒鳴り声が聞こえて、びっくりしたことがある。もう母は亡くなっているのにね。

母は子どもみたいに純粋な人だったけど、ドイツまで留学した自分を素晴らしいと鼻にかけて、お前らはなっちゃいないって、しょっちゅう私や周りの人をけなしていました。子どもの頃から毎日毎日そう言われていたら、おかしくなっちゃいますよね。

売れっ子になっている今の私を母に見せてあげたいわ。NHKでドキュメンタリーが放送されて、有名になる前に亡くなってしまったから。母が生きていたら、さぞや喜ぶだろうと思いますね。

子ども一人一人の育ちと学びを理解し、豊かな学級経営と深い授業づくりを促進する

早稲田大学教育・総合科学学術院
教授　小林　宏己

ポイント

①教師の仕事の本質は、反省的実践―謙虚に、思慮深く、見とりと手だてを重ねる歩み―の遂行にある。

②子どもの育ちと学びの内に、主体性・多様性・協働性の発揮がみられてこそ、学級経営と授業づくりは充実する。

③公平で公正な情報に基づく子ども理解は、教師間の同僚性が活性化する「チーム学校」において実現する。

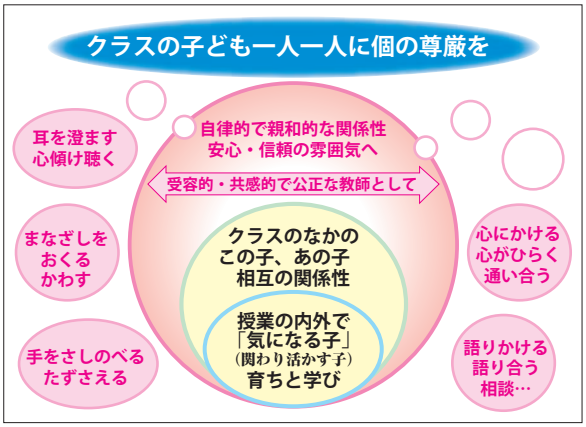
教師の仕事の本質とは何か

時代の変化に伴い多様で高度な教育課題が積み上がるなか、各地の学校では教員間の世代交代が進んでいる。そうした状況下にあっても、教師の仕事の本質が、子どもに寄り添い、謙虚に思慮深く、一人一人の育ちと学びに対する見とりと手だてを重ねる反省的実践の遂行であることに変わりはない。しかも、子ども一人一人の育ちと学びの状況を総合的にとらえて、日々の学級経営と授業づくりに活かす営みは、教師一人一人にとって経験の如何を問わず、複雑で高度な実践を伴うものである。

そうした専門性が求められる教職の実践は、はたしてどのように効果をあげて実現されているか。多忙と言われる教師が日々の仕事を進めるなかにあって、子どものよさや可能性について語り合い、教材開発や授業展開の話に花が咲くことはどれほどあるか。子ども一人一人を理解するための視点はどのようなものか。豊かな学級経営と授業づくりを具現化するための支援・指導の手だてはどうあればよいか。今各地の学校において、教師間で検討を重ねる熟議の場と熟考する時間はどのように確保されているだろうか。

主体性・多様性・協働性の発揮が見られるか

「子ども一人一人を大切にする」「子どもを誰ひとり取り残さない」教育の実現は、時代の変化を超えた不易の課題である。そのためには、まず各学校の教師一人一人が子どもの育ちと学びをよく見とり、その個性を理解し、学級経営と授業づくりに活かす手だての構想と実行、その後の反省的な振り返りとしての省察を促進させ、さらなる見とりと手だての改善が生み出されていく好循環がはたらくことを期待したい。



見とりと手だての構想・実行・省察・改善を重ねる際には、子どもの側にどのように主体性・多様性・協働性の発揮がみられるかを視点にして考察を深めたい。

例えば、学級経営が一方的な規律の徹底で過度に統制されていないか。授業づくりが定型化した学び方の適用ばかりで単調になっていないか。こうした「させられる教育」からは、同調圧力が高まるばかりで子どもの間に安心と信頼は生まれないし、正解探しに終始するばかりで納得解や最適解が創出されることも難しい。

「何とかできるようになりたい、解き明かしたい、このままではみんなが困る…」と切実に問いかける子ども、相談し合う子ども、試行錯誤し粘り強く考える子どもなど、「本気の子ども」の姿がみられるか。「どうなることがよいか。その実現のためには、どうすればよいか…」と子どもどうしはもちろんのこと、必要ならば教師も一緒になって相談の輪に加わる場面が現われているか。

子どもの主体性は「自己決定性」が尊重されてこそ実現する。それは同時に、個々の子どもの多様な意志の共存を生み出していく。その結果として、多様な意志を相互に尊重しあい協働する場が拓かれていく。親和的で円滑な学級経営と豊かで深い授業づくりには、主体性・多様性・協働性の発揮が必要不可欠と考えたい。

教師である「私の見かた」は公平・公正であるか

主体性・多様性・協働性の発揮は、子どもばかりではなく教師の側にも求められる。教師一人一人の個性は尊重されてよいが、過度な個別化や孤立は避けたい。特に今日経験の浅い教師が増加するなか、この点は見逃せない問題である。見とりと手だてを重ねる歩みは、主に教師自身の主観に基づくものである。学級担任と教科担任の別を問わず、それらは教師一人一人の個別化された解釈であって、場合によっては恣意的になりがちな危うさを内在させている。

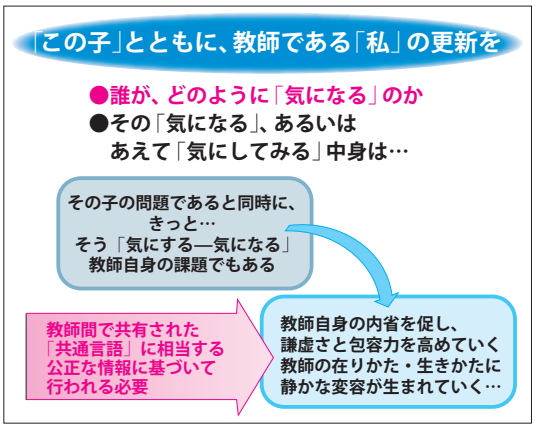
クラスの誰が、どのように「気になる」のか。その「気になる」中身はその子の問題であると同時に、きっとそう「気にする—気になる」教師自身の課題でもある。だからこそ、「この子」とともに、教師である「私の見かた」も問い直す必要がある。

見とりと手だての積み重ねは、可能な限り公平で公正な情報に基づいて行われなければならない。質問紙や面談などを通じて、子どもの思いを尋ね、声を聴くという方法もあるが、最も重要な点は教師の解釈と判断をめぐる公平・公正さの保証にある。

そのためには、教師一人一人が自ら子ども一人一人に寄り添い、それぞれの育ちと学びについて適切な見とりと手だてを重ねる際に、教師間で共有された「共通言語」に相当する公正な情報に基づいて行われる必要がある。教師による深い子ども理解と豊かな支援・指導の実現は、そのためのスキルの向上や公平・公正な解釈の多様な具体化とともに、教師自身の在りかたにも更新を促し、教師間の同僚性を活性化する営みとも重なりながら展開されていく。

従来は単年度の学級（担任）単位の解釈・判断に終始しがちであった。こうした学級（担任）中心の在りかたを超えて、子ども一人一人の成長・発達とともに、「この子」に即して実施された見とりと手だての構想・実行・省察・改善に関する一連の情報が、経年的に蓄積・共有され、「チーム学校」単位で活かされていく形となることが望ましい。

子ども一人一人が豊かに生きる学級経営と深く学ぶ授業づくりは、子どもの見とりと手だての専門家としての教師が自律し、互いに協働していく学校（職場）づくりに通じている。懸案となっている教師の業務軽減の道も、こうした同僚性が活性化する途上に拓かれていくのである。



大切にされていると思うとき 初めて言葉は届く 教師が育つ、子どもが育つ学校へ

～In-Child Recordを通して～

沖縄県宜野湾市立嘉数（かかず）中学校
元校長　仲田　丘（つかさ）

ポイント

①課題→解明→解決、この流れに確実に一本の軸を通す。
②解決のための策は学校全体で取り組む長期的な展望に立った実践とする。
③児童生徒、教師が一体となった感動を共有することを最終ゴールとする。

課題の解明と解決

長い教員生活の中で多くの子どもたちと関わった。その中で特に印象的な出来事がある。中学3年男子で授業を抜け出し、校内外の徘徊、暴言等。その度に連れ戻し説諭するが、いつも興奮気味で聞き入れない。保護者との相談会ももつが母親は常に参加してくれたがほとんど話さず、学校への要望などはなく終始無言で会を閉じるときに礼をして帰るだけだった。「いつもすぐに来校してくれることはありがたいし、母親としての思いもわかるがもう少し何か話してくれないか」連日同じことの繰り返しに職員も疲弊し不満も出始めた。しかし何も解決することなく時は流れ卒業式を迎える。式の朝、出勤が早い職員が報告に来た。「今朝6時ころ〝○○の母ですけどこれを3学年の先生方へ、それと関わっていただいた先生方へお願いします。〟と言って置いていきました」発泡スチロールの箱を開けてみた。そこには手作りのティラミスが100個入っていた（写真1）。その1個1個に「ありがとう」と書かれている。その「ありがとう」はどれが最初で、どれが50個めで、どれが最後の100個かわからない。心を込めた美しい「ありがとう」だった。ここで初めて気づいた。我々は解決だけにこだわってこの親子の苦しみに向き合っていなかったのではないか。なぜそうなのかも考えずに行動の是正を本人に求め続けていたのではないのか。しかしこの子を育てた母親は気づいていた。「そんなやり方ではこの子には言葉は届かない。小さいころからみんな大人の関わりはそうだった」ではなぜ「ありがとう」なのか。我々の取組は改善の兆しにはつながらなかった、推測でしかないがそれでも男子を離さず関わり続けたこと、それに対する「ありがとう」そして「忘れないで」というメッセージ、そう受け止めた。私にとってこのことは「気になる子」「生徒理解」への深い示唆となった。

写真1

解決のための策は学校全体で取り組む長期的な展望に立った実践とする

管理職として学校経営に関わるようになって見えてきたことがある。学校、学級で日々起こる小さな問題は、組織ではなく学級担任など教師個人が単独で対応していることだ。十分な時間のゆとりもない中で教師個人の工夫や努力、それも初任者、ベテラン関係なく過去の経験による主観的なものに頼り、解決を最優先に取り組むことが多いため疲弊感を伴うことも少なくない。せっかくの学級成長のチャンスもうまく活かせず、教師個々のスキルも育ちにくいのが現状である。このような中で教師どうしで同僚性を高め、学校全体の取組として子どもたちに向き

合うそんな技法はないか。生徒理解と学級経営を結びつける学校全体としての策が講じられないか。あの「ありがとうのティラミス」のスピリッツを後から来る教師たちに伝えるにはどうすればいいのか。その時に出会ったのが「In-Child-Record」（ＩＣＲ）というアセスメントツールだった。初めて聞くネーミングに違和感もあったがそれは私が求め続けていたものだった。その「In-Child」とは「Inclusive Needs Child」の略称で、「発達の遅れ、知的な遅れまたはそれらによらない身体面、情緒面のニーズ、家庭環境などを要因として、専門家を含めたチームによる包括的教育を必要とする子」を指す。つまりそれまで「気になる子」と曖昧に捉えていたものを明確に定義しているのである。それも発達障害、特性などに特定せずすべての子どもを対象とするものである。さらに「In-Child Record」とは「困りごとを抱える生徒の状態を把握するための初期アセスメントツールで、学校生活の中での生徒の様子を身体面・情緒面・生活面・学習面からチェックすることで、何が原因となって、どんなところで困っているのかを把握し、学校内でどのような支援ができるのかを考えて実践することができ、生徒の状態によっては早期に外部の支援機関（医療・福祉・行政など）へつなぐことも可能」である。懸案だった「課題→解決」を「課題→解明→解決」に枠組みする画期的なツールだった。「もっと子どもと深く関わりましょう」「もっとよく観察しましょう」等々、学校現場では意外に具体的に何を指すのか、曖昧なまま実践を指示することも少なくない。そんな取組の輪郭を明確にしたのがＩＣＲだった。「観察しましょう」とは身体面・情緒面・生活面・学習面からなる82項目（図１）に答えることである。教師が児童生徒の学校での様子について質問に回答することで、児童生徒へ対応するべきポイントを客観的に把握することができるようになっている。さらには、学級の中で実施できる一人ひとりの児童生徒に合わせた教育プログラムをつくり、粘り強く全職員（事務員、嘱託職員も含む）で実践する。それが円滑な学級運営や確かな授業づくりにつながり、学校全体の変化につながるのである。

図１

児童生徒、教師が一体となった感動を共有することを最終ゴールとする

解決のための策はできた。しかし壁もあった。導入に際してその作業量の戸惑いだ。「82項目を全員にですか」「全員です」初めての作業であることから悉皆（しっかい）の取組とした。ため息が混ざる中でベテランの熱血女性教諭が「この程度の項目すぐに終わりますよ」と笑顔で言った。それが取組の合図になった。しかしその２日後、彼女が校長室に入って来た。「校長先生、私あの82項目ショックでした」「やっぱり多いですか」「いえ違います。実はまったく記入できない子が３人いるんです」「え？ ああ、そういうことか。当てようか、いい子３人でしょう？」「そうなんです、手がかからない分、何も見てなかったんです。もしかしたら声をかけない日もあったと思います。それも数日、それを考えると…」見えていなかった輪郭が見えてきた。このエピソードは、その後全職員で共有した。

生徒たちも協力し学校全体でプログラムを実践し続けていくと、対象となる生徒に大きな変化がみられ、それに伴い学級の子どもたちも大きく成長した。生徒教師が一体となった実践はその後、学年、生徒会、学校行事へと広がり生徒の学校への思いを大きく変えた（図２）。当初手作業だったＩＣＲもより多くの学校が活用できるようデジタル版が開発され、２０２０年度には、市内の全小中学校にＩＣＲをコアとしたシステム「結（ゆい）－Ｅ（えん）Ｎ」が導入された。今、学校現場は検証もないまま課題解決に対応していかなければならない大変な時代に入った。こんな時こそ「結－ＥＮ」を通じて、教師が児童生徒一人ひとりに向き合い、適切な指導をすることで、子どもたちは子どもどうしの輪の中で安心して成長することができると私は確信している。教師と子どもたちの深い信頼を築き、授業は心豊かな学びの場となり、児童生徒たちは学校を圧倒的な感動の舞台へと作り上げていく、そんな学校が全国に広がり、子どもたち、教師の笑顔があふれる社会になることを願っている。

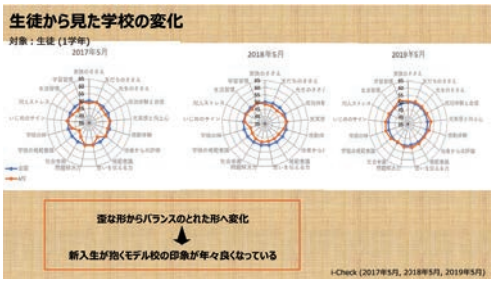


図２

江戸川区角野栄子児童文学館とは

江戸川区角野栄子児童文学館は、本区の南東に位置するなぎさ公園内の「展望の丘」に建設しています。（なぎさ公園：東京都江戸川区南葛西七丁目３番１号）

なぎさ公園は園内のいたるところにサクラやツツジなどが植えられ、みどりとともに四季折々に咲く花が楽しめるすばらしい環境で、角野さんの世界観を表現する施設にふさわしい場所として選ばれました。

児童文学館は、見晴らしの良い「展望の丘」と一体化した設計となっており、丘の地形に沿った地上３階建て（延床約 1,650m^2）の建物となります。

設計コンセプトは、「子どもたち自身が心を動かして、おもしろさを見つけ、感じて、そこから自分の世界を発見して、想像力豊かな心を育めるような施設」。花のように軽やかに広がる「フラワールーフ」が特徴的な施設に入ると、角野さんのテーマカラーである「いちご色」に彩られた、あっと驚くような世界が広がります。

施設の機能としては、1、2 階に読書・展示エリア、3 階にカフェエリアがあります。

1 階のエントランス部分では、角野さんの代表作「魔女の宅急便」の物語から飛び出したキキとジジがお出迎えします。展示エリアでは、角野さんの作品に登場するキャラクターたちに出会うことができ、角野作品の世界観にふれることができます。そしてさらに進むと、角野作品の世界に浸り、物語をじっくりと読むことができる読書エリアが広がります。

大階段を上がった 2 階にも、読書エリアがあります。ここは角野さんが選書した「子どもから大人までが読める、おもしろい物語」をそろえています。1 階と合わせて約 9,000 冊の「おもしろい本」が来場者に手にとって読んでもらえるのをお待ちしています。

2 階には他にも角野さんのアトリエを再現した常設展示室、さまざまな企画展を行うことができる企画展示室もあり、いろいろなたのしい仕掛けを準備しています。

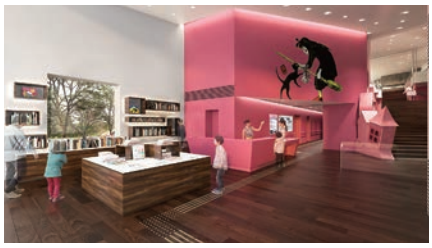
オープンは 2023 年 11 月。これから、さまざまなイベントを企画し開館までを盛り上げていきます。皆様のご来館を心よりお待ちしています。

最後に、この児童文学館に込めた角野さんの想いをご紹介します。

▲フラワールーフ

▲丘と一体化した建築

▲大人も楽しめるカフェ


▲物語から飛び出した
キキとジジが出迎えるエントランス

▲１階と２階をつなぐコリコの町の大階段

▲角野さんの選書した本が読める読み場

児童文学館への想い

わたしがこの文学館に託した願いは、子どもも大人もおもしろい物語に出会って欲しいということです。ほっぺたを熱くして、無我夢中で本を読むたのしさ、そんな時間を、この文学館で過ごしていただきたいと思いました。そのために、とびっきりワクワクする本、思わず手を伸ばし、読み始めたら止まらなくなるような本を集めたいと思っています。人の手を借りるのではなく、自分で自由に選んで、大好きな本を見つけてください。本とそのような出会いができたら、その本はその人の一生の友達になり、励まし続けてくれるでしょう。

それが本が持っている、不思議な力です。魔法の力です。この文学館を訪れた皆さんが、自分だけの魔法を見つけて、家に持って帰ってくれたら、こんなに嬉しいことはありません。

児童文学作家　角野栄子

きょういく見聞録

江戸川区に子どもたち自身が心を動かし、創造力を育む場所を。

江戸川区は東京 23 区の東部に位置し、三方を河川と東京湾に囲まれた水とみどり豊かなまちです。
「学びと協働で区民文化をはぐくむふれあいのまち」を目指し、文化の創造に取組んできました。

その江戸川区で過ごされた角野栄子さんは「魔女の宅急便」を始めとする数多くの優れた児童文学作品を生み出している作家で、「国際アンデルセン賞」など数多くの文学賞を受賞されてきました。
現在、角野さんとゆかりの深い本区では、未来を担う子どもたちが角野さんの世界観を享受でき、豊かな想像力を育む場となることを目指した児童文学館の建設を進めています。

江戸川区　新庁舎・施設整備部計画課

児童文学館の開設経緯

角野さんは 2018 年 8 月、児童文学の小さなノーベル賞ともいわれる「国際アンデルセン賞」を受賞。区は、この偉業を称え「江戸川区区民栄誉賞」を創設し、記念すべき最初の受賞者としてその功績を顕彰しました。

また、同時にその世界観を未来を担う子どもたちに伝えていくとともに、児童文学のすばらしさを広く世界に発信していこうと、児童文学館建設構想をスタートさせました。

区では 2019 年 9 月に基本構想を策定、2020 年 1 月には国立競技場の設計を手掛けるなど世界で活躍する隈研吾さんを設計者に選定し、基本設計・実施設計ができあがりました。

そして 2021 年 10 月、建築工事に着工し、児童文学館周辺の公園整備と合わせて 2023 年 11 月のオープンに向けて順調に進んでいます。

■これまでの経過と今後のスケジュール

2018年	角野さん「国際アンデルセン賞作家賞」受賞※
2019年	角野さん「江戸川区区民栄誉賞」受賞
2019年	児童文学館建設を公表
2019年	基本構想策定
2020～2021年	基本設計・実施設計
2021年	建設工事着工
2023年	開館予定

※世界的児童文学の権威者による国際選考委員会で決定。「児童文学の小さなノーベル賞」ともいわれ、子どもの本の分野における最高の国際的な賞。受賞は、日本人 3 人目。

江戸川区と角野栄子さん

1935 年に東京で生まれた角野さんは 3 歳から 23 歳までを江戸川区の北小岩で過ごされました。

角野さんは「幼い頃に見たり感じたりした江戸川区の風景はいつまでも忘れることなく、その体験や情景が今も作品に表現されている」と、ふるさと江戸川区への想いを大切にされています。

▲江戸川の土手で（18 歳）
写真提供：角野栄子オフィス

▲親戚と（右端）
写真提供：角野栄子オフィス

写真提供：角野栄子オフィス

▲国際アンデルセン賞の授賞式
写真提供：KADOKAWA

■角野栄子さんプロフィール

1935 年	東京生まれ 幼少時代は北小岩在住、江戸川区立中小岩小学校出身
1957 年	早稲田大学教育学部英語英文学科卒業後、出版社勤務
1970 年	「ルイジンニョ少年ブラジルをたずねて」で作家デビュー
1985 年	「魔女の宅急便」野間児童文芸賞、小学館文学賞
2018 年	「国際アンデルセン賞 作家賞」受賞
2019 年	「江戸川区区民栄誉賞」受賞

●致道館表御門　　写真提供：致道博物館

山形県鶴岡市

公益財団法人
致道博物館代表理事・館長
酒井 忠久

わが町に「致道館」あり
～現代に息づく江戸時代の「個性伸長」の教育実践～

かつての庄内藩の藩校であった「致道館」は、現在の山形県鶴岡市の中心地にあります。その始まりは1805年、酒井家九代・酒井忠徳（ただあり）によって創設された学問所に始まりますが、1816年に現在の地に移されました。現在の「致道館」は東北地方に唯一現存する藩校建造物であり、孔子を祀る聖廟、講堂、御入間（おいりのま）、表御門などの建物とその敷地一帯は国指定史跡にもなっています。

今も地域に根付く致道館の教育実践をご紹介します。

致道館の特色

「致道館」の名称の由来は、『論語』の一節「君子学んで以て其の道を致す」に由来し、1873年に廃校となるまでのおよそ70年間、多くの人材を世に送り出してきました。創設における「被仰出書（おおせいだされしょ）」には「人にはもって生まれた得手と不得手があるから、その人の得意なところを伸ばすように先生方は指導しなさい」など、個性の伸長や人材の育成などにも細かくふれられています。

生徒一人ひとりの長所を伸ばすことを基本に、自ら学び、思考し、実践する学習経験の積み重ねを重視したものといえ、江戸時代にもこのような「個性伸長」の教育を具現化したことは驚くべきことといえるのではないでしょうか。

古典素読をもっと身近に

「素読」――すなわち書物（特に漢籍）を繰り返し音読することは、かつての日本人にとって、教養の基礎ともいえるものでした。こうした学習法を次世代につなげようと、さまざまな取組を行っています。

旧藩校「致道館」と致道博物館では特に「庄内論語」に親しめるように、小中学生とその保護者の皆さんを対象に素読体験ができる「素読教室」を行い、レクリエーションとして文化施設巡りを行っています。地

●初めて開かれる「論語素読検定」を前に緊張する子どもたちに優しく話しかける致道館文化振興会議　橋本政之会長（2022年８月）：写真提供　荘内日報社

域の小学校でも素読を教育に取り入れている学校があり、児童文学作家を招いた時は６年生が論語の暗唱をしました。学校の新規採用の先生方は鶴岡の文化施設を巡り、藩校「致道館」で論語の体験をするなど、江戸時代の英知を見直す活発な取組がなされています。

地域に根付く致道館の教え

今年もコロナ対策を講じながら「少年少女古典素読教室」が開かれ、鶴岡市内の10人の小学生が「論語抄」を素読する元気な声が２か月余り響き渡りました。今年は酒井家庄内入部４００年を記念し、さまざまなイベントが行われていますが、その一環として、鶴岡市内の小中学生に無料配布されている「親子で楽しむ庄内論語」を活用した検定会を８月に初めて実施しました。

論語書道や論語作文のコンテストなど、市内の小中学生を対象にしたユニークな取組も毎年行われています。

こうした活動も「致道館」がこの地にあったからこそといえます。今も「致道館」の教えは庄内・鶴岡に深く息づいているのです。

●「酒井家庄内入部400年」ロゴ

●致道館講堂に掲げられている扁額

●荻生徂徠像
（致道博物館蔵）

●新採教員新任者研修での素読

※致道博物館では、酒井家庄内入部400年を記念し、特別展が開催中です。詳しくはHPにてご確認ください。

全国各地のさまざまな取組を紹介します。

東京　社会科への興味関心を高める社会科検定

前八王子市立第八小学校　校長　有賀　康美（やすみ）

令和２年度から新指導要領が実施になり、教科書や地図帳も内容が改定されたことに伴って、「一人でも二人でも社会科に興味をもってほしい」「できれば社会科の学力がついてほしい」という私の願いから、教科書や地図帳の内容でそのまま問題を作り、検定としてみました。３年生は「地図の基本、八王子市の歴史、地理、市の木、鳥、花など」、４年生は、「都道府県、東京都の歴史、地理、交通、都の木、鳥、花、伝統工芸、災害など」について、５・６年生は、教科書と地図帳の具体的内容に準拠しています。また、学習指導要領に例示されている 42 人の人物について、人物名と説明の組み合わせの問題もあります。検定は全部で 20 種、906 問になりました。３・４年生の地域学習は、自分の郷土のことなので全問正解、５・６年生程度の検定は８割の正解で検定合格としました。児童は、検定の問題に即した事前学習の資料（Ａ４用紙２枚程度で全てにふりがな付き）で検定に備えて学習を進めます。もちろん教科書や地図帳だけでも学習できます。合格児童は発表するとともに認定証や表彰状を作成して渡します。校長室前の廊下に全ての検定の「事前学習資料」「問題」「解答用紙」を児童がいつでも持っていけるように置いておきます。どの学年の児童でも、自分の挑戦したい分野や内容を自由に選べます。提出された解答用紙は、私ができるだけ早く採点し、合格した児童には、「認定証」を渡して校長室前の廊下の壁に「各検定の合格者」として掲示しました。全検定制覇には大判の「表彰状」も出しました。これは大きな励みになりました。「検定」という形式と「認定証」というご褒美で思った以上の効果があり、社会科好きの児童が増えました。このような検定という取組を通して「社会科っておもしろいな」という児童が一人でも増えることを願っています。

廊下写真（事前学習資料・問題・解答）

北海道　ほっかいどう学の挑戦

認定 NPO 法人ほっかいどう学推進フォーラム　理事長　新保（しんぼ）　元康（もとやす）

「北海道の子どもたちにもっと北海道を！」これがわたしたちのキャッチフレーズです。

北海道は、他の都府県が 12 個以上入る広大な大きさを誇ります。同時に人口減少がはじまってすでに 25 年。この間に約 50 万人減少しているのです。一方で北海道に向かう道外、海外からの視線は熱を帯びています。北海道の自然、食、アイヌ文化、パウダースノー…あふれる魅力に視線がくぎ付けと言ってもいいでしょう。

地元の人間は大幅減少。そして、外からは巨大資本からの熱いまなざし…。このままでは北海道の主役が誰なのかわからなくなりそうです。活力ある北海道の主人公は、北海道の子どもたちであってほしいと思うのです。

実は、北海道に関する学習は昭和 50 年代以降ぐっと減っています。北海道の多様なる魅力も、冬には最高気温が零下の日が続くこともある中で脈々と整備され今の豊かさを支えているインフラについても、さらには、未来の可能性についてもほとんど学んでいないと言ってもいい状況が続いています。地元を知らないままでは、地方創生も絵に描いた餅に終わりかねません。

今、わたしたちは、北海道をより豊かに学ぶ「ほっかいどう学」プロジェクトを全道各地で進めています。写真は、網走の子どもたちが地元の魅力を自分たちの力でとらえ直した作品です。「シーニックバイウェイ北海道」という、大人気の事業があります。「眺めのよいわき道に北海道の魅力が溢れていますよ。わたしだけの北海道の旅を創りませんか」という呼びかけです。これを小学生が自分の目線で創ったのです。GIGA 端末を使ってのトライアルは最高におもしろかったようです。

認定 NPO 法人ほっかいどう学推進フォーラムでは、今後ビデオクリップの作成をはじめ、GIGA 時代にふさわしい地域学習の在り方を積極的に探っていきます。皆様の応援をよろしくお願いいたします。

https://hokkaidogaku.org/

静岡　地域とともにある学校づくり ～清水町の目ざすコミュニティースクール～

清水町教育委員会　教育長　朝倉　和也

清水町は各学校で学校運営協議会を設置し、コミュニティースクールに指定しています。平成27年度は意見交換・説明会、28年度は「試行実施」段階として、基本構想の策定や仕組み・体制づくりを行うとともに、２回の協議会を開催し、29年度より本格実施をしています。30年度は、６回の学校運営協議会を計画し、そのうちの２回を全体会とし、学校運営協議会委員の情報交換、情報共有の場とするとともに、コミュニティースクールの骨格づくりの場としました。全体会で話し合われた内容を今後、①「清水町の教育」の全体構想＝第２期教育大綱の骨格　②保・幼・小・中一貫教育の具体的実践　③グランドデザインの基盤　④学校運営の具体的実践事項への反映　⑤人材の確保、予算の基礎資料として活用していきます。コミュニティースクールの導入、取組によって、学校改革や地域づくりの糸口になると考えています。

令和元年度以降については、「第５次清水町総合計画」「第２期教育大綱」を策定するとともに、町長部局主催による「ワークショップによる広聴・広報事業」（清水町みらい会議・町民によるワークショップ・小中高校生との意見交換会・地区懇談会）を実施しています。地域から学校へ、子供・学校から地域への関心の高まり、保護者・地域・学校・行政の迅速な情報共有と対応、話し合いによる双方向納得の意思決定が変化してきました。

今後の課題として、①学校運営協議会全体会による「清水町の教育課題と具体策」の検討　②学校運営協議会の運営（各校の推進テーマの策定・運営組織づくり、他の組織との連動・融合）　③学校運営（『地域を学ぶ・地域で学ぶ・地域に学ぶ』学習プログラムの作成、ギガスクール、インクルーシブ教育等、地域総ぐるみによる現代的課題への対応策等の検討、実践）が挙げられます。

神奈川　自己肯定感を高めたGIGA端末

厚木市立厚木小学校　校長　小林　正徳

学習指導要領の改訂により、学校現場では新たな取組が増えている。これに加え、GIGAスクール構想による１人１台のGIGA端末の導入、コロナ禍によるGIGA端末の持ち帰りへの対応など、教員は日々悪戦苦闘している。そんな中、プログラミングの学習、GIGA端末の利用によって活躍の場を得た児童の話を紹介したい。

この児童は教室で落ち着いて学習できず、校舎内をふらつくこともあった。また、人とのかかわりも苦手でトラブルも多かった。落ち着かせるために校長室で話をして過ごすこともあった。こんな関係もあり、相談事があると、校長室に来るようになった。

担任から、児童がプログラミングの学習が好きで、家でもよくやっているという話を聞いていた。そこで、学校のみんなに役立つようなものが作れないか相談をしてみたところ、次の日には支援級の子が使える、絵を押すと音が出るものを作ってきた。そのできばえに驚いていると、数日後、GIGA端末を使って平仮名の入力を練習するためのゲームを作ってきた。このゲームは音楽が入っていたり、キャラクターを選ぶことができたりと、すばらしい作品で、情報担当にお願いし、全校児童が使用できるように設定してもらった。

卒業式前になって、彼は再び校長室に相談にやって来た。担任にサプライズ企画をすることになり、動画の編集を任されたということだった。クラスのみんながこの児童の能力を認め、依頼したようである。時間もないし、大変だと言いながらも、とてもうれしそうな表情を浮かべていた。

自分の作ったゲームを学校のみんなが楽しんでくれたこと、クラスのみんなに自分の力が認められたことなど、活躍の場を得たことで、自己肯定感を高めることができたのである。

地球となかよし ゼミナール

困難なときこそ文化芸術【連載第3回】
～カタルシス（喜怒哀楽）を美術で体験、子どもの成長に必須～

建築家　原田敬美（けいみ）

トルコで子供の震災学習に絵画コンクール

1999年、トルコのコジャエリ県大震災で3万人が犠牲となりました。2015年、コジャエリ大学で震災復興国際会議が開催され、私は東日本大震災復興について報告を依頼されました。会場で、小学生を対象に震災をテーマに絵画コンクールが実施されたことに驚きました。表彰式には県知事、市長も出席しました。

入賞作の一つに目を奪われました。小学校3年生の入賞作です。日本の自衛隊が避難所に贈ったテント（日の丸）とトルコ軍が用意したテント（月）が描かれた絵です（法的制約で「訓練」名目で自衛艦がトルコにテントを輸送しました）。

16年前の大震災について、母親が日の丸テントを覚えていて、小学生の娘に描かせたものです。絵を通して悲惨な大震災を学習することは大切、有意義なことです。

ニューヨーク市役所、コロナ禍の文化芸術支援

新型インフルエンザの蔓延で文化芸術は、不要不急という理由で予算が削減されています。ニューヨーク市は逆に文化芸術の予算を充実させました。こういうときこそ生きる喜びを感じるため文化芸術が必須です。市役所は2022年に50億円の予算を付け、1000の文化芸術団体を支援しました。特に学習機会が劣るスラム地区の子どものため美術学習を支援しました。また、ジャズで有名なハーレム地区のアポロ劇場や世界的に有名なメトロポリタンオペラ、ニューヨーク・フィルにも支援金を出しました。

ウクライナ、戦闘中でも音楽演奏、美術展開催

2月24日、ロシア軍がウクライナに侵攻。ニューヨークタイムズによりますと、ロシア国境近くのハリコフ市の避難所でヴァイオリンの演奏や、爆撃を受けた街中でチェロの演奏がありました。ピアニストが避難所でピアノ演奏。トランペット奏者が地下鉄駅で国歌演奏。また、西側の都市リヴィウの国立美術館では、展覧会が開催されています。館長曰く、市民を勇気づけると同時に「ロシアへの抗議行動」でもあるとのこと。リヴィウの国立歌劇場ではコンサートやダンスが公演されました。

美術を通じカタルシス（喜怒哀楽）を体験することは、子供の教育にとって必須。特に、困難なときこそ、芸術が大きな勇気、元気、活気を与えます。

翻って、日本では困難なときに文化芸術は不要不急と見なされます。特に、政治、行政に携わるかたに、文化芸術こそ必須と認識していただきたいものです。

原田敬美（Harada Keimi）
建築家、工学博士、技術士（建設）、前東京都港区長。川口市文化芸術審議会会長。1974年、早稲田大学大学院建設工学専攻修士課程修了。1980年、SEC計画事務所設立。1983年から、港区の街づくり懇談会、都市計画審議会、住宅とマスタープラン策定、環境調査審議会委員などを委嘱。2005年、イタリア・コメンダットーレ叙勲。

◀2015年トルコ、コジャエリ大学が主催した震災復興国際シンポジウムで、絵画コンクールの入賞作品。避難所のトルコのテントと日本の自衛隊が贈った日の丸テントがテーマ。入賞した小学生と母親に祝意を伝える原田。

Front Runner

【連載第１回】（全３回）

未来を描き、「学び」を拓く

東京学芸大学教授・こどもの学び困難支援センター長
加瀬　進

１．学校と地域が拓く「学び」

東京学芸大学では、2015 年度より７年間にわたって「子どもの貧困」研究に取り組んできました。その中で私たちが改めて発見したのが学校と地域、それぞれ本来の機能が果たす役割の大きさです。学校において「わかった・できた・楽しいね」と実感できる授業は貧困に立ち向かえるように子どもの元気を充填し、地域における多様な人々との出会いや体験活動は、制約された社会参加を充足します。この二つはときに独立して、ときに協働して、社会保障・社会福祉にはできない、学校と地域だからこそできる「子どもの貧困」へのアプローチとなるのです※。

こうした成果に触発されて、2021 年度に「東京学芸大学こどもの学び困難支援センター」を設立しました。このセンターでは貧困に加え、虐待、不登校という課題に対し三つのプロジェクトを立ち上げて、“学びを拓く“をキーワードに実践研究や研修教材の開発をすすめています。現在、NPO 法人、教育関連企業、学校、教育委員会、教育支援センター、子ども食堂、放課後学習支援、第三の居場所といった団体や機関等とネットワークをつくり、センターのホームページに組み込んだアーカイブにその成果を蓄積していこうとしています。

２．研究のステップと研究フィールド

センターでは五つのステップで研究を進めています。まず、願いを共にしてくださる方々と研究フィールドを定めます（ステップ１）。次にそのフィールドと本センターのスタッフ、学生等が協働して実践を展開します（ステップ２）。そしてこの実践をベースに、さまざまな角度（ニーズ把握やアセスメントの方法、ICT を含む教材の開発、遠隔学習の方法や効果の検証、支援者の課題分析）から実践研究を行います（ステップ３）。以上を受けて研修教材の開発や研修を行い（ステップ４）、成果をアーカイブ化するというものです（ステップ５）。

現在の研究フィールドは三つ。貧困研究は沖縄の名護子ども食堂と本学をオンラインでつなぎ、学生と共に学習支援、プロジェクト学習（スイーツ開発等）、居場所運営モデルの開発を行っています。虐待研究は大阪の NPO 法人み・らいず２が実践を展開している「第３の居場所」等で虐待がもたらす「学び困難」の諸相を解明しようとしています。そして不登校研究はこどもの学び困難支援センターが東京都小金井市教育委員会と協働して大学構内に移設した「もくせい教室（教育支援センター／適応指導教室）」を舞台に不登校の小中学生（附属学校児童生徒を含む）を対象に「よりそい」と「学習支援」の研究を進めています。

次回からは、本センターが取り組む実践研究を紹介させていただきます。乞うご期待ください。

sure for All Children

※松田恵示監修、入江優子･加瀬進編著『子どもの貧困とチームアプローチ ―“見えない”“見えにくい”を乗り越えるために―』書肆クラルテ、2020 年

第20回 地球となかよしメッセージ

作品発表のお知らせ

「第20回 地球となかよしメッセージ」入賞作品は
『Educo』2023年冬号（2023年1月下旬発行予定）
で発表します！
昨年度の入賞作品は，教育出版ホームページでごらんいただけます。

「地球となかよし」という言葉から感じたり，
考えたりしたことを，
写真やイラストにメッセージをつけて表現する
「地球となかよしメッセージ」。
今年度も，すばらしい作品が集まりました。

『Educo』バックナンバーについてはお問い合わせください。

難病の子どもたちの笑顔のために
～あなたがうれしいと、私もうれしい～

ほ・っ・と・な・出・会・い

メイク・ア・ウィッシュ オブ ジャパン
チーフアドバイザー
大野 寿子（おおの ひさこ）さん

つらいのはきみひとりだけじゃないよ

メイク・ア・ウィッシュは難病の子どもの夢を叶えるお手伝いをするボランティア団体です。1980年にアメリカで始まったこの活動は世界50か国に広がり、日本支部は今年で設立30周年を迎えました。もうそんなになるのかと驚くと同時に、子どもたちが引っ張ってくれた年月だったと実感しています。

どの子もそれぞれ思い出深いですが、私を変えた出会いは、清水美緒ちゃんという12歳の女の子です。『いちばん大切なもの』という自作の物語の絵本を出版すべく、急性リンパ性白血病と闘いながら、制作打ち合わせを重ねました。

その本につけるしおりに、彼女は「つらいのは　きみひとりだけじゃないよ」で始まる温かいメッセージをつけたのです。体がしんどくて、なぜ自分ばかりこんなめにと病気を恨んでも不思議じゃないときに、知らない誰かのことを思いやっている。顔も知らない誰かの心に寄り添い、自分も人の役に立ちたいと願っている。この子は一体何なんだろうって、本当にすごい衝撃でした。

残念ながら絵本が完成する一日前に、美緒ちゃんは旅立ちました。それまでマスコミの取材では、ほかの難病の子やご家族への影響を考えて、亡くなってしまった子のことはあまりふれないようにしていたのです。でも、こんなに立派に生きた子を、亡くなったからって消しゴムで消すようなことをしてはいけない。この子がどんな風に生きたか、伝えなきゃいけないって強く思ったんです。私にとって大きな転換点でした。

ボランティアの3つのススメ

今まで多くの学校に講演に行かせていただきましたが、優秀な学校ほど「みんな、お話を聞いてどう感じた？　自分にどんなことができるかな？　思うだけじゃ駄目だよ、ずっと続けるんだよ」と教えていて。でも、いいなと思ったらやってみる、そのくらいの軽さでいいんです。かねてからお伝えしているボランティア三か条がありまして、まず「①三日坊主のススメ」。三日しか続かなくてもなじらずに、「いい経験したね」とほめてやってほしい。そのうちまた、ひょっこり始めるかもしれません。次に「②売名行為のススメ」。日本でこういう活動をしていると、偽善とか売名行為とよく言われますが、大いに結構と思っていて。「泥団子農法」といって、荒れ地にそのまま種をまいても滅多に芽は出ませんが、泥団子に種を埋め込んで団子ごとまくと、すごく発芽率が高いんです。私たち一人一人が泥団子の役割をして、この世によい種を根付かせ、大きく芽を伸ばすための媒介になるのなら、すばらしいことだと思います。最後に「③自己満足のススメ」。悲壮感を漂わせて自己犠牲をするのではなく、まず自分が楽しんで生き生き活動すること。その姿に周囲も感化されて一緒にやりたくなる。人を呼び寄せ、巻き込むことができるのです。活動の中で素敵な人たちに出会い、活動の意味や深い魅力を知る中で、「あなたがうれしいと私もうれしい」と感じられる人に成長していきます。

夢は次の夢へと続いていく

難病の子が夢を叶えたら、生きる意欲を失ってしまうのではないかと心配されたこともあります。でも、夢を叶えた子のお母様から、「夢の実現はゴールではなく、新しい夢のスタートラインです」と言われたとき、本当にそうだなと。夢は叶ったかどうかではなく、心に夢を抱いて、楽しんで生きること、夢の実現に協力してくれる人たちがいると知ること、それこそが重要なのだと思います。うちの子は夢がないんですとよく相談されますが、親の姿勢は大きいですね。おもしろい夢を語る子は、やっぱり親がおもしろい。学校の勉強さえしていればいい、みたいな家の子は、夢を見つけにくいのかもしれません。子どもが何かに興味をもっている姿をゆっくり見守り、大事にしてやってほしいですね。

ボランティアの基本は、「共に生きる」ことへの想像力と共感力だと思います。どれだけ相手の状況を想像し、共感できるか。教育現場にいる先生がたは、子どものそういった部分を伸ばしてあげてほしいと切に願います。

大野寿子（おおの　ひさこ）
1951年香川県生まれ。上智大学在学中から演劇活動を開始し、劇団四季付属演劇研究所に所属。卒業後、商社マンと結婚し、4人の男児の母となる。夫の転勤に伴い渡米するも、離婚して帰国。1994年に再婚。同年、メイク・ア・ウィッシュに出会い、参加。1998年に東京本部事務局長に就任。2016年に定年退職し理事に就任。現在も広報として講演活動を続けている。著書に『メイク・ア・ウィッシュ夢の実現が人生を変えた』（KADOKAWA）他多数。

Educo Salon

前号について寄せられたご感想です。

◆今号を読んで全ページが「子ども主語」「子どもの主体性」ということを感じました。多くを学ばせていただき感謝です。ありがとうございました。（茨城県 R.T）
◆佐藤可士和さんの言葉には、教育にとっても根源的なことが散りばめられていると感じました。教師が生徒に向き合う上で大切にすべきことのヒントがたくさんありました。（青森県 S.K）
◆知っておきたい教育 NOW ②高松市総合教育センターの取組に刺激を受けました。伝達型の研修だけでなく、いつでも誰でも参加できる課題解決型の研修は新たな課題が山積する現場のニーズに応えることができると思いました。（愛知県 T.S）
◆「きょういく見聞録」で北海道の取組が紹介され、うれしく思いました。知床観光船の事故でウトロ学校の子どもたちの「責任ある観光」の学びが後退しないことを願います。（北海道 Y.D）

なかよし宣言

わたしたちをとりまく自然や社会は、科学技術の進展や国際化、情報化、高齢化などによって、今、大きく変わろうとしています。このような社会の変化の中で、人間や地球上のあらゆる命がのびのびと生きていくためには、人や自然を大切にしながら、共に生きていこうとする優しく大きな心をもつことが求められています。

わたしたちは、この理念を「地球となかよし」というコンセプトワードに込め、社会のさまざまな場面で人間の成長に貢献していきます。

教育出版は持続可能な開発目標（SDGs）を支援しています

Educo No.59 2022年9月30日発行
発行所　教育出版株式会社　発行者　伊東千尋
〒135-0063 東京都江東区有明3-4-10 TFTビル西館
内容について　Tel.03-5579-6554　Fax.03-5579-6574
配送について　Tel.03-5579-6546　Fax.03-5579-6548